海原純子
●インタビュー/文

# 海原純子×海野雅威 二人のジャズ表現者が紡ぐ魂の対話(後編)

心療内科医で作家・ジャズシンガー海原純子と，コロナ禍のNYでアーティスト生命を危ぶまれる重傷を負いながらも，奇跡の復活を遂げたピアニスト海野雅威による魂の対談「後編」。2人の会話は，より本質的な音楽の話へ，ディープなジャズの深淵へと足を踏み入れてゆく。

この夏，ご自身のトリオやソロピアノ，渡辺貞夫さんとの共演，若手ミュージシャンたちとのセッションなどジャズファンにとって，わくわくするようなライブが続いている海野雅威さん。前回のインタビューで偉大なリーダーたちとの関わりについてお話してくださった中で強く印象に残った言葉があります。それは，「まだまだだっていう気持ちにさせられたようなことは，僕は正直なかったんですよね。それよりもそのままの自分をもっと貫けって鼓舞してくれる方が多かった」というものです。その言葉を糸口に海野さんにお話を伺いました。

**海原(以下J)**　あの言葉にドキッとしました。「そのままの自分を大事にして磨きをかける」という視点は，残念ながら日本の教育の中であまりないと思います。

**海野**　幼少の頃からジャズに触れられたという経験が，やはり今につながっていると強く実感しています。9歳からジャズピアノを始めたので，僕のそばにはいつも温かく見守ってくださる大人がいました。両親は僕にプロのジャズピアニストになってもらいたいなどとは思っていなかったようで，僕自身が好きならば続けて豊かに生きてほしいと思っていただけだと思います。強制的に習い事をさせられたりすると，親を喜ばせるために続け，ある日突然音楽も嫌いになってしまうというような弊害が生じる事もありますが，僕の場合はのんびりと自分自身でジャズの楽しさを見つけて好きになっていったんです。自分が好きなものを見つけたり知る事は喜びであり表現の基本ですからね。最近，日本の若手ミュージシャンをたまたま聴く機会があったのですが，演奏は上手なのですが，どこか心から演奏したい表現ではなく，他人から見てよく思われたいと思っているんではないかと言う演奏に感じてしまったんです。悪い意味で空気を読みすぎているという印象で。一方，アメリカのジャムセッションで若者に合うと全く真逆の演奏に触れることがあります。例えばソロを延々と(時に30コーラス以上！)取り周りの事など一切気にしていない，まるでエゴの塊のような演奏(苦笑)。周囲も苦々しい思いでその演奏を我慢するという苦行のような瞬間ですが，でも演奏する本人からは「俺はこう演奏したいんだ」という気持ちは人一倍伝わり，ある意味清々しかったりします。これは極端な例ではありますが，日本とアメリカの教育や育て方のテーマとしてどこか本質に触れるような話かもしれません。初心者は黙ってろと言う風潮を感じる日本と，初心者だろうがなぜか自信満々なアメリカ。どちらがいい悪いではありませんが，表現する上では人のことを気にすると言うのは優しいようでいてピュアではないかもしれず，人になんと言われようとこれがやりたいというものを持っているミュージシャンは実は純粋なのかもしれません。ロイにしてもハンクにしても，僕に対して「こういうのもあるよ，こうしたほうがもっといいよ」と言ってくれたことはありますが，当然ながら上から目線で何かを教えてやるといった態度ではありません。僕になら伝わるのではないかという期待や，そもそも僕が持っているものに対してさらにアドバイスをくれたり。単純な話，もし1から100まで全てを手取り足取り説明しなきゃいけないようなミュージシャンなら声がかからないわけです。彼らは僕の教育係ではないですからね。よくロイはツアー中にライブのプロモーションを兼ねてヨーロッパ各地で一人でラジオ番組に出演していました。そんな時に決まって僕のことを「最高のピアニストが今俺のピアニストなんだ」と誇らしげに言ってくれていて(直接は言ってくれないようなこともラジオを通して)信頼してくれている事をひしひしと感じました。尊敬する人に信頼されるというのは，何よりも心の糧になっていますし，彼らから感じた経験は人生の指針になっています。僕がこれから未来ある若者と接する時にも，本人も気がついていないような良い部分を後押しして勇気づけていけたらと思っています。

## 初心を忘れずに，音楽が好きだ，音楽を聴くのが好きだという気持ちを大切に

**J**　以前にコロナ禍の中行われたポジティブサイコロジー医学会の総会で海野さんに演奏していただきました。ポジティブサイコロジー医学では，その方の特性のいい部分や強みを活かしてのばすこと，気持ちをポジティブに向けるという考えです。

**海野**　僕の場合は音楽をするということ自体が既にポジティブな行為の救いです。心穏やかでいられる祈りのようでもあります。自分が演奏していなくても聴いているだけでも癒され，生活に活力を与えてくれます。音楽はあらゆる意味で自己肯定感を高めてくれると思います。よく考えることなんですが，そもそもどうして音楽を好きになったかと言えば，自分が演奏したかったからではなく，素晴らしい音楽を聴いたときに心が感動し，自分もやってみたいと思ったからです。ミュージシャンとして専門的になりすぎると演奏のことばっかりになりがちなのですが，初心を忘れずにつまり音楽が好きだという事は音楽を聴くのが好きだということなんですね。

**J**　先日海野さんのソロピアノを聴きに行きました。すごく暑い日だったのですが，心地良く，とてもくつろぎリラックスすることができました。音の空間に招待されたような，ふわっとした気分になれて，一緒に参加できた感じがしてこれは海野さんの人柄だなと思いました。ああいう空気感を作れるのは素敵です。

**海野**　それは嬉しいです！ ありがとうございます。ライブは今を生きるっていうことですから，文字通りその場限りの一期一会。二度と同じ演奏はできません。その場にいてくださる皆さんの期待感や音に対する集中力は演奏にも反映されていて，つまりライブというのは，たとえソロピアノであっても必ずしも僕1人が弾いているわけではなくて，会場が一体となって表現されていくものだと思っています。ライブならではの醍醐味ですよね。

**J**　最近の若者は子どものころからデジタルネイティブでいい音楽を配信でどんどん聞けるし，10代になったころにはかなり音に関してキャリアを積んだ状態になっていることも多いです。20代になったころには万能感というか，どこか上から目線のような雰囲気を感じさせる演奏を聴くこともあります。ちょっと残念だなあ，と思うこともあるんです。

## 音楽への情熱や愛というのは，つまり人への愛

**海野**　これは先日初共演した渡辺貞夫さんとも，まさにお話していたことにも通じます。貞夫さんは焼け野原になった戦後の日本で貧しくとも心豊かに生きてこられ，たくましさや慈しみ優しさが演奏にも現れています。皆で一丸となって復興してきた日本。ジャズミュージシャンも今よりも熱い思いで，真剣に音楽に取り組み仲間同士の友情も深かったようです。貞夫さんの先輩で師匠的な存在であった伝説的ピアニスト，守安祥太郎さんが当時唯一チャーリー・パーカーのソロを完璧にコピーして楽譜にすることができ，何度も何度もレコードを擦り切れるほど聴き(当時大変貴重なレコードです)，苦労して採譜したであろうその楽譜を惜しげもなく貞夫さんに貸して，貞夫さんがそれを写し取り，そのノートを先日貞夫さんに見せていただきました。不便だからこそ今以上のものすごい情熱や音楽に対する愛があったことは間違いありません。皆が前を向いて助け合って生きていかなければいけなかった。その時代だからこその心の豊かさかもしれませんね。今はコミュニケーションを取らなくても自宅で1人でスキルを身に付けることができるかもしれませんが，決定的に何かが欠けているように私も感じています。それはきっと心なんでしょうね。知識を詰め込んだ，なんでも理解してる気になっている，まるでAIのような人間がこれから増えてきたとして何が面白いでしょうか。音楽への情熱や愛というのは，つまり人への愛でもありますからね。

**J**　その人の人間性が音楽になるんですね。

**海野**　チャーリー・パーカーの名言で，「音楽とは，君自身の経験であり，君の思想であり，君の知恵なのだ。もし君がまことの生活を送らなければ，君の楽器は真実の響きを持たないであろう」というのがあります。パーカーは音楽だけではなく，政治や宇宙，化学，哲学などあらゆることに興味を持っていました。だからこそのあの音楽なわけです。表現者であり，アーティストである前に人間なわけです。真剣に生きてきた生活が音楽になっている。ここから学べる事は僕たちミュージシャンは特に肝に銘じて，音楽のこと以外にも真剣に生きるということだと思います。結果的にどう生きてきたかが音楽に反映されるわけで，これは前回にもお話ししたことに通じますね。現代は1人で何でもできているような錯覚に陥りやすい時代だと思いますが，誰かと心通う経験というのが大事ですよね。音楽から人生を学べる事はたくさんあります。そして生活から学べることがまた音楽に還元されていきますから，結局本質はどう生きるかなんですよね。(完)